

2020年11月4日

日本イーライリリー株式会社

〒651-0086
神戸市中央区磯上通 5-1-28
www.lilly.co.jp

EL20-52

～ 11月14日は「世界糖尿病デー」～

インスリン治療を50年以上継続している糖尿病と共に歩む方々 第18回「リリー インスリン 50年賞」受賞者12名を顕彰

日本イーライリリー株式会社(本社:兵庫県神戸市、代表取締役社長:シモーネ・トムセン、以下、日本イーライリリー)は、インスリン治療を50年以上継続されている糖尿病と共に歩む方々に敬意を表し顕彰する、第18回「リリー インスリン 50年賞」を12名^{※1}の受賞者に贈りました。

受賞者の方々には、50年以上にわたるインスリン治療の道のりを振り返りながら、ご家族や医療従事者など、周囲の方々への感謝や、他の糖尿病と共に歩む方々への励ましのメッセージなどを語っていただきました。

今年は新型コロナウイルス感染拡大防止に配慮し、各ご施設でお祝いをして頂けるように授賞式の形式を変え、表彰をサポートしています。また、受賞者の方々にはご本人のお名前を刻印したトロフィーをお贈りしています。

<院内表彰サポートセット>



<記念品:トロフィー>



日本イーライリリーの代表取締役社長 シモーネ・トムセンは次のようにコメントしています。
「50年以上インスリン治療を続けられている皆様にこのような賞をお届けできることを大変光栄に思います。特に今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、いつも以上に大変な思いをされ、不安な日々を過ごされている方も多い中、皆様の治療継続のご努力に心から敬意を表します。米国イーライリリー社が1923年に世界で初めてインスリンを製剤化してからまもなく100周年になりますが、今後も世界中の糖尿病と共に歩む方々に寄り添い、継続的なサポートを提供してまいります。」

「リリー インスリン50年賞」とは

インスリン治療を50年以上継続されている糖尿病と共に歩む方々の長年のご努力を称えることを目的に、1974年に米国で始まりました。これまでに米国を中心に世界で14,000名以上に授与されています。日本では2003年に表彰を開始し、第18回を迎えた本年度を含めてこれまでに184名が同賞を受賞されています。

日本イーライリリーは、「リリー インスリン 50年賞」を受賞された方々が、インスリン治療を継続する全ての糖尿病と共に歩む方々に勇気と希望を与え、治療に前向きに取り組む上での目標となることを願っています。

^{※1} 2020年10月末までに事務局に申込書が到着した方

第18回「リリー インスリン 50年賞」受賞者プロフィール

※報道関係者様への情報公開のご了承をいただいた受賞者9名を50音順でご紹介します。
※受賞者プロフィールの内容は、個人としての見解です。

◆伊藤 三恵 様（インスリン治療歴 50年 / 1型糖尿病 / 1961年生まれ / 東京都在住）

自分のいろんな選択や決断を見守ってくださった皆さんに50年分の感謝を伝えたいです。

小学3年生で発症した時、製薬会社に勤務していた父から「目が悪い人が眼鏡をかけるのと同じ、注射をすれば健康な人と同じだから心配するな」と言われたことを覚えています。社会生活を送る中で心がけてきたのは、周囲に1型糖尿病であると伝えること、病気をできない理由にしないこと。

2010年秋にポンプ導入、2011年夏に突然の眼底出血、8キロのダイエット成功。2002年にコーチングに出会い、今も学びを続けています。ドクターを含め多くの方々に見守られ、迎えることができたインスリン50年賞。これを良い機会に、自分と家族を支えてくださった皆さんと喜びを分かち、感謝を伝えたいと思います。



◆奥井 友弘 様（インスリン治療歴 50年 / 1型糖尿病 / 1947年生まれ / 茨城県在住）

糖尿病であることを受け入れ心を開いて人と接することで前向きに人生を歩いてきました。

23歳のころ、一晩でコーラを何本も飲むようになり多尿で体重が激減。それが糖尿病の影響によるものだと知り、大きなショックを受けました。同僚に病気のことを理解してもらうのは簡単ではありませんでしたが、まず心掛けたのは自分自身の心がオープンであること。そうすることで気持ちが楽になり、仕事と治療に専念できました。

かれこれ40数年あたたかい言葉をくださる主治医の先生や、規則正しい生活に導いてくれる妻、人との出会いが大きな励みとなりました。インスリン治療を必要とする方に「仲間がたくさんいます。くじけることなく前向きに、人生を楽しんでください」とお伝えしたいです。



◆亀山 勝子 様（インスリン治療歴 50年 / 1型糖尿病 / 1944年生まれ / 長野県在住）

「糖尿病患者でも出産したい」切なる願いを実現できたことが人生の大きな転機でした。

糖尿病に気づいたのは25歳。妊娠検査で尿糖が検出され、10カ月で胎児を亡くしました。26歳の妊娠では「4カ月以内に中絶しなければ、母子ともに命はない」と告げられましたが、諦められず。入院した病院で出会った先生の大きなお力添えがあり、無事に男児を出産しました。糖尿病患者は子どもを持たないと言われた時代、出産は人生の大きな転機になったと思います。

病気を知った当初は絶望で未来が見えませんでした。出産を経験して前向きになりました。そこから何があっても治療と血糖コントロールを最優先。目の前の課題を一つずつ精一杯やるうち、いつの間にかもう50年、今はそう思えます。

◆高佐 幹雄 様（インスリン治療歴 50年 / 1型糖尿病 / 1954年生まれ / 北海道在住）

この病気がなければ出会えなかった人々の大きな力に支えられて50年。

50年賞、妻と一緒に受賞したいです。

15歳の冬にひどく喉が渇き、意識が朦朧となり入院。血糖値は700mg/dl以上もあったそうです。高校時代は、登校前に病院で注射をもらって治療を続けました。卒業後、地元の役場で充実した日々を送りましたが、28歳で硝子体出血を起こして入院。病気のことを、職場でもっとオープンしておくべきだったと今は思います。

これまで内科、循環器科、眼科、心臓血管外科、泌尿器科、透析室でお世話になった先生とスタッフの方々には感謝しかありません。今の主治医も心のあたたかい先生です。

残念ながら、感染性心内膜炎で現在入院中ですが、50年賞まで支えてくれた妻のためにも一日も早く元気になりたいです。



◆K.T 様（インスリン治療歴 52 年 / 1 型糖尿病 / 1958 年生まれ / 長野県在住）

サマーキャンプで学んだこと 安心をくださる先生との出会いが治療の日々を支えてくれました。

発症したのは小学生の時。水をよく飲み、夜中に何度もトイレのため起きなければならなくなりました。一年間で体重が激減したので東京の病院に入院することに。退院してからは母が毎日インスリン注射をしてくれました。ほどなく、サマーキャンプに参加して「具合が悪い時は我慢なくていいこと」、「どんなことがあってもインスリン注射をやめてはいけないこと」を学びました。

出産時に大変お世話になった先生、地元の病院で一番長く診ていただいた先生など、これまで何人もの素晴らしい先生と出会い、相談を重ねながら治療を続けてきました。信頼する先生のお顔を見るだけで、いつも安心した気分になりました。



◆徳久 郁乃 様（インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1968 年生まれ / 鹿児島県在住）

先生からいただいた知識を深めてコントロールできた時の達成感とは他では味わえないものだと思います。

1 歳 9 カ月で発症した当時、注射器はガラス製で煮沸消毒が必要でした。この 50 年で、使い捨てになり、針の細いペン型やポンプになり、注射のストレスは格段に減りました。また今があるのは、心から信頼できる先生との出会いがあってこそ。コントロールについて問いかけ、知識をいただき、考えながら実践し、結果を報告する。その継続の日々が「糖尿病は特別だけど、特別ではない。コントロールさえできれば、なんだってできる」というやる気につながりました。もし神様から、人生を好きにやり直すことができると言われても、私は迷うことなく、自分がこれまで歩んだ 1 型糖尿病と共に生きた日々を選ぶと思います。

◆根岸 良夫 様（インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1940 年生まれ / 東京都在住）

絶えず学びを深めながら、インスリンとともに生きる者として決められたことを実行してきました。

30 歳のころ、会社で喉がひどく渇いて牛乳やサイダーをガブガブ飲み、「おかしいな」と異変を感じました。大きな病院で糖尿病の診断を受けて入院した当初、「これから毎日、インスリン注射をし続けなければならないのか」と大きなショックを受けました。

退院後、何度か低血糖で運ばれたこともありましたが、会社勤務を継続。教育入院で学習を重ね、主治医の先生から日々の生活に関わる重要なポイントを伺いながら、糖尿病についての知識を深めていきました。

これまでインスリンとともに生きる者として、決められたことをきちんと実行したおかげで今年 80 代に。こんなにも長生きできるとは思いませんでした。



◆山岡 壽子 様（インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1950 年生まれ / 奈良県在住）

どんな時もそばにいてくれた優しい主人とふたりの子どもが長い治療の日々の支えでした。

20 歳の時に高血糖で意識をなくし、初めて病院に運ばれました。50 日ほどで退院しましたが、今度は低血糖で再び入院することに。二度目の退院後からインスリンとの生活が始まりました。「それまで健康でいたことが嘘のよう。これからインスリンと長い付き合いになるなあ」と覚悟しました。

そのころは使い捨ての注射ではなかった時代。毎朝、煮沸消毒をしなければならないのが大変でしたが、公務員としてまわりの方々に支えていただきながら楽しく働きました。振り返ってみると、優しい主人と結婚し、子どもを授かり、子育てをできたことが、治療を続ける上でなによりの励みだったと思います。



◆R.Y 様（インスリン治療歴 50 年 / 1 型糖尿病 / 1967 年生まれ / 東京都在住）

最新の治療法と周囲の力添えで 50 年を迎えることができました。

次は 75 年、100 年をめざしたい。

発症したのは 3 歳になる前でした。あまりに幼かったので当時のことは覚えていません。朝・昼・晩、医師の指示通りのインスリン量を注射していましたが、1986 年までは自分で血糖測定することができず、コントロールが非常にむずかしかったです。一年に 6 回入院したこともありました。働き始めてしばらくして自動注入ポンプ、自己血糖測定器の使用を開始。医療の進歩によって改善されていく治療法が、大きな励みとなりました。また支えてくださる多くの人たちの思いや力があって、この 50 年賞があると感謝しています。これからも日々のケアを怠らず、75 年、100 年をめざしたいと思っています。



世界糖尿病デーとは

拡大を続ける糖尿病の脅威を踏まえ、2006 年 12 月 20 日、国連は国連総会で、国際糖尿病連合 (IDF) が要請してきた「糖尿病の全世界的脅威を認知する決議」を加盟 192 カ国の全会一致で可決しました。同時に、従来、IDF ならびに世界保健機関 (WHO) が定めていた 11 月 14 日を「世界糖尿病デー」として指定しました。IDF は決議に先駆け、「Unite for Diabetes」（糖尿病との闘いのため団結せよ）というキャッチフレーズと、国連や空を表す「ブルー」と、団結を表す「輪」を使用したシンボルマークを採用。全世界での糖尿病抑制に向けたキャンペーンを推進しています。

（出典：World Diabetes Day Committee in Japan https://www.wddj.jp/01_howto.htm）

日本イーライリリーは、世界糖尿病デーに関する世界的な取り組みの一環として、神戸本社を11月11日から3日間、世界糖尿病啓発のシンボルカラーである青色にライトアップします。

日本イーライリリー株式会社について

日本イーライリリー株式会社は、米国イーライリリー・アンド・カンパニーの日本法人です。人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう、革新的な医薬品の開発・製造・輸入・販売を通じ、がん、糖尿病、筋骨格系疾患、中枢神経系疾患、自己免疫疾患、成長障害、疼痛、などの領域で日本の医療に貢献しています。

詳細はウェブサイトをご覧ください。 <https://www.lilly.co.jp>

糖尿病事業について

日本イーライリリー株式会社は、糖尿病のトータル治療を提供するリーディングカンパニーとして、画期的な糖尿病治療薬の研究、開発および情報提供活動に尽力していくとともに、「リリー インスリン 50 年賞」をはじめとしたサポート活動を通じ、糖尿病と共に生活をされている方々に寄り添い貢献してまいります。